# 64年目の手紙

中西喜美子
大阪府・84歳・無職

山田様、本当にお久しぶりでございます。

突然の手紙に、さぞかし驚かれる事と存じます。

光陰矢のごとしと申しますが、お別れ致しましてより、64年の歳月が流れてしまいました。お元気でお過ごしでございましょうか。若い日の思い出に浸りながら、したためています。

初めてお会い致しましたのは、弟と親しくして頂いていたことからでしたね。中西は、勤務先が実家より遠いので、家の近くに下宿していました。

偶然に、おふたりと弟と私の4人で仲良しになりました。また偶然なのは、おふたりより私に結婚の申し込みを、同時に受けたことです。

弟はあなたと、と願いました。父は中西を……。悩みましたが、赤い糸に結ばれていたのか、中西と結婚をして下宿先の近くに住みました。

ある夏の日、白かすりにステッキをついて、家の前を歩いておいでのあなたに、偶然お会いしました。懐かしく存じました。

「喜美子さん、もし中西さんとお別れになるようなことがあれば、いつまでもわたしは待っています」

と、立ち去られる後姿をながめて、なんと上品な方だなあーと見えなくなられるまで見送っていました。

その後、幾たびもお見かけしたのに、まったくお見えになりませんでしたね。急に私はとても寂しくなりました。現在まで、お会いできないまま、永い永い年月が過ぎました。

話が一度に変わりますが戦時中、夫は召集になって行きましたが、無事に帰れました。

喜んだのもつかのま、6月15日に、我が家を戦火で失いました。着のみ着のままからの苦労は、戦後長く続きました。

結婚前はよくお手紙を頂きながら返事は一度も致しませず、すみません。必ず和歌を添えて頂いて、その文を大事にしまっていたのに、家と共に焼けてしまい残念でなりません。

返事をだせなかった想いを、64年目にどこにどうしておいでかと初めて書きました。